

# 一 刀三禮の精神

京都帝國大學教授  
工學博士 鳥養利三郎

筆者は去る日、京都綫部なる那是製絲の本社工場を參觀する機會を得た。之れ迄にも所謂那是精神なるものは、多少傳へ聞いては居つたが、あれ程偉いものとは夢にも思はなかつた。私は、那是の幹部の方々の精神態度及従業員諸氏のそれに比較して、吾々が如何に不真面目であるかを痛感し、頭から「ガーン」と叩かれた感じがした。實際の那是精神を吾々が了解する事は中々六ヶ敷しい事であらうし、又吾々の筆で感想記を書いて見た處で、眞實を傳へる事は及びもつかぬ事と思ふが、私は參觀した中の二三の點に就いて簡單に書いて見たいと思ふ。

(一)、朝禮、此の工場には二千名の女工が居る。女工と書いては失禮なので、社長以下社員總てが世間の所謂女工を「工女さん」と呼んで居る。それが御座なりの愛嬌呼びでない事は勿論で、心から可愛くてたまらぬ工女さんといふ感じである。之れ等の工女さん達を主に、それに男社員は専務以下總てが加はつて、午前六時の始業前に夫々持ち場で朝禮を行ふのである。私は工場内の一室に案内せられたが、其處には兩側に秩序井然と糸繰機の前に端座した工女さんの列を見た。私は少々野次氣分で、普通の工場參觀と同じ氣持で入つたのであつたが、あまり嚴肅な光景に先づ度膽を抜かれた。私の様な野人でも嚴肅なるべき式場にも相當參列した經驗はあるが、此處（それが工場である）程嚴肅といはうか神聖といはうか、シーンとして涙の出る様な感じをした事が無い。思はず直立不動の姿勢を取つたのであるが、同行の青柳博士はいふ迄も無く、平素私と同様に少しく野次性の勝つた物理の吉田博士もシャチコ張つて直立して居る。暫くすると主任の號令で、聖歌を歌ひ、歌ひ終れば各自合掌して、感謝祈禱黙想を續くる事しばし、次に指先の運動練習をして愈々一齊に仕事に取りかゝるのである。さて聖歌を歌ひ、黙禱を捧ぐる事は

天下到る處に行はれてゐる事で敢て珍とするに足らぬ。只異なる處は其の態度である、精神である。數十人の工女さんが聖女の様に見えた。之から作り出さんとする糸に魂を打ち込まむとする神の聲と聞かれた。吾々三名は思はず涙を漑へて一同に引きずられて合掌した。斯ういふ感銘を受けた式場へ列した事は私は今日迄無い。しかもこれは一つの工場では無い。斯ういふ氣持で始めた仕事こそ神の仕事である。糸が悪からう筈が無い。

大體斯ういふ氣持で仕事をして居る工場が他に澤山あるであらうか、製品に魂を打ち込んで作つてゐるであらうか。恥しい話ではあるが大學の講堂は如何、教授が入つて來ても、起立敬禮をするでは無く中には頰杖をついた儘で「ノート」を開けてゐる。自己の學ばんとする事に敬虔の態度を缺くにも程がある。こんな事で何が出来るか、私共は子供の時に祖父から習字、讀書等を習ふ時には、机の前に端座し姿勢を正し必ず書物に一禮する事を教へられた。現今の大學の講堂を思ふと誠に恥かしい事である。幸に私の大學では、近年學生が規律正しく、起立敬禮する美風を作つて呉れて居るので結構であるが、那是のそれに比すれば及ばざる事遠きを恨む。自分の仕事を始めるのに「チャランポラン」な氣持で始めたり、自分の仕事を汚くしてゐる様ではとても良い仕事は出来ない。古の作品に良い物の多いのは物質的な考を持たずに、眞面目な氣持で作つたからではないか。所謂「一刀三禮」の氣持で仕事をしてこそ天下無比の製品が出来るのではないか。聽講の初めに敬禮もしない様な學生に何が出来るか。那是の朝禮は當に「一刀三禮」の精神である。絲が良く無くてたままるものか。

(二)、私共は當日社員の修養講話を傍聽する事が出来た。其日の講話が又私の心を打つた。要項だけを記して見ることにする。曰く、男工と女工との寄宿舎の掃除を比較して見ると、どうしても女工の方が上手で男工の室は何となく汚い。夫れは世間一般には當然の事として捨て、ある問題である。しかし何故に男子は掃除が下手かといふ事を研究せしめたと云ふのである。各室の室長を集めて何回も何回も會議を開い



たり、又能ふ限り叮嚀に掃除もするし、整理もするし、種々努力して見たがどうしても、何所となく、女子の室に較べて垢抜けがしない。色々と苦しんだ揚句、一人が云ふには、一氣に綺麗にしようとするのがいけないのだ。垢を一邊に取りらうと思つて床を雑巾で拭くと、柱の最下部が黒くなる（之れは何處でもそうなつて居る）この柱の下部の汚れを綺麗にしようと思ふて力を入れてゴシゴシすると黒いのは取れるが、其の代り柱の木目が荒されてしまふ。男性の掃除は正に斯くの如き方法で行うて居るのであつて、例へば柱も床も美しくなつては居るが木目が害せられて居るといふ譯で何處となく汚い感じがするのだ。それを力も入れずこするでもなく軽く何回も何回も根氣良く拭き込み、決して一氣に掃除をしようなどと思はぬ様にすれば、立派な掃除が出来るのだ、と斯う云ふのである。掃除と云ふ事に就いて斯く迄徹底的に指導をせられた方には敬服の外無いが、更に苦勞の結果上記の様な結論を得られた男工諸君には吾々は頭が上らぬと思ふ。此の掃除哲學こそは吾々の萬般の事柄に當て箴まる事と思ふ。現代の人は、何でも急ぎ過ぎる。一氣にやつつけるのでなければ承知しない。私自身がそうである。而し何事によらず、ほんとに物の眞髓に觸れるには性急は禁物である。平素すぼらをして置いて、必要の時に一氣に事をなす等といふ事は持つての外である。毎日毎日、少しづつ倦まず弛まず勉強をして、そして時日を掛けたものでなければ良いものは無い。拭くでもなくこするでも無く、軽く、毎日毎日或は毎時毎時、撫でて居つてこそ、そしてそれが長年月積り積つてこそ立派な掃除になるのである。一日や二日力任せに、こすつて同じ掃除になるのであつたら世の中が不公平になる。私は大學で電氣磁氣學の講座

を持つて居る。學生が六ヶ敷くて解らぬといふから私はかう返事をする。即ち「こんなものが一度にわかつてたまるか。毎日少しづつ勉強をして（その代りしない日は無い事にして）そして解つても解らなくてもよいから何遍も何遍も繰り返へせ」と。「讀書百遍意自ら通ず」私も電氣磁氣學を受持たされた當時には自分自身にもよく分らなんだ。それを十何年講義して居つたら何時の間にもやら理解が出来て來た。電氣磁氣學に限らず、學生の學習といふものは總て斯の流儀でなければ駄目である。敢て學習と云はず、社會の萬事は之れでは無いか。私は郡是の掃除哲學に多大の感興を覺える。

以上は單に二つの點に就いての感想を記述したのであるが、同工場に於ける一日の所得は實に多大であつた。一言にして言へば同工場の社員は上下擧つて一つの信念を持つてゐる事である。識見を持つて居る事である。只單に生活の爲に給料を得んが爲に働いて居るので無い事である。我國現在の病根は、善惡共に信念の無い事である。「現代の世相は不安だ」とは何人も口にする。しかも單に然か云ふだけであつて如何にして之れを救ふかに就いては爲す所を知らない。然う云ふ天下國家の大問題に就いては吾々は關せずとしても、自己の與へられた職業に就いて一の識見を持ち信念を持つて働いて居るものが何人あるか。月俵さへ呉れればそれでよいと云ふ意味で働いて居る者が大部分である。大學にも種々の世相の現はれが及んで來て、學生の問題が複雑になつて來るが、第一の病根は吾々教官に一つの抱負も信念も識見も無く、只單にボンヤリとして勤めて居ると云ふ事であらうと悟つた。之れが郡是工場の見學で得た大きな所得である。

（日立評論、昭和八年二月號掲載）